地域高齢者の咀嚼能力と全身の健康状態との関連性　―栄養状態・体
力・医療費からの検討―

守屋　信吾1, 鄭　漢忠2, 井上　農夫男2, 山田　裕之1, 安藤　雄一1,

江藤　亜紀子1, 三浦　宏子1

1国立保健医療科学院　口腔保健部

2北海道大学大学院　歯学研究科

【目的】わが国は世界一の長寿国となったが、要介護状態に陥る高齢者の増加や老人医療費の高騰は大きな健康課題である。低栄養や低体力はADL低下の主要な原因となっているため、その関連要因を明らかにすることは重要である。そこで、本研究では咀嚼能力と栄養状態、体力との関連性、さらに医療費との関連性を明らかにする。【方法】平成16～17年において、北海道苫前町と岩内町において実施された高齢者口腔健康調査に参加した821名の自立高齢者を対象とした。背景因子として年齢、性別、教育年数、社会活動性、全身疾患等を調べた。また、栄養評価として血清アルブミン値、体力評価として握力と身体平衡機能(開眼片足立ち秒数)、医療費として国民健康保検加入者の歯科以外の1年間の医科外来および入院診療報酬点数を用いた。咀嚼能力は、自己評価にて3件法を用いて調べた(何でも噛める:良好，少し硬い物なら噛める:概良，軟らかい物しか噛めない:不良)。得られたデータについては、Spearman順位相関などの2変量解析と、多重ロジスティック回帰分析等の多変量解析を行い、咀嚼能力の良否が及ぼす影響について調べた。【結果】咀嚼能力が概良、不良の者では、良好者に比べ、低血清アルブミン値（4.0g/dl未満）を示す頻度が有意に高かった。また、多重ロジスティック解析を行った結果においても、咀嚼能力の良否は血清アルブミン値と有意な関連性を示した(オッズ比1.43, P)。一方、咀嚼能力と握力、開眼片足立ち秒数には正の相関関係がみられた。前期高齢者においては、重回帰分析により背景因子を調整したうえでも、咀嚼能力は握力(P)と開眼片足立ち秒数（ P)に有意に関連していた。また、咀嚼能力の良否については医科外来医療費と有意な関連性をしめさなかったが、入院医療費との間で負の相関がみられた。多項ロジスティック解析の結果、咀嚼能力が不良な者では、入院医療費無の者を基準とすると、3万点以上かかる者の割合が有意に高かった(オッズ比3.04, P)。【考察】咀嚼能力が低下している者では、栄養状態や体力が低下し、入院医療費がよりかかることが示された。因果関係や咀嚼能力が関連を示す入院医療費の詳細な内容の分析ができなかったなどの制限はあるが、地域で自立している高齢者においては、咀嚼能力の良否が栄養状態や体力だけでなく、入院した場合の医療費に関連する可能性が示唆された。